

## 一 悲劇の幕開け

「奥様、今夜は旦那様がいらっしゃるとのご連絡がありましたわ。」

家政婦として山口家に仕えている榎田美紀は、マイセンのホワイトティーカップを、天然大理石の高級テーブルに静かに置いた。豊潤なダージリン紅茶の香りが匂う。榎田美紀は28歳になる独身女性だ。高校中退後、山口家に家政婦として務めている。かれこれ、もう10年以上もこの屋敷で家政婦をしていることになる。

山口さゆりの表情が曇った。美しい顔立ちの女性だ。抜けるような白い肌は透明感をもって、彼女の美しさをひときわ引き立てている。曇らせた表情も上品な中に美しさがある。

「それから、奥様。今夜は、私も同席をさせていただきますからご承知ください」

向かい側に座るさゆりの娘、亜由美の前にも同じマイセ

ンのカップを置きながら、美紀は女主人のさゆりを振り返った。その夫人を見る顔は目を細め、微笑んでいる。

「同席？」

さゆりは怪訝な表情で、若い家政婦を見つめる。丸顔にくりっとした瞳の幼い顔立ちの美紀が、さゆりを見て、もう一度笑った。

「奥様と旦那様の男女の営みを見学させて頂けることになりましたの。奥様が可愛がられるお姿を拝見したいと願いましたのです。旦那様は快くお許しになりましたわ。」

気品ある美しいさゆりの顔がみるみるうちにこわばっていく。高利貸し業の木村泰造に金で縛られ、仕方なく情婦となっている身ではあるが、家政婦にその男女の営みを見られることは、身を裂かれるほどの恥辱以外の何ものでもない。泰造に組み敷かれ、性交する姿を美紀は本当に見るつもりなのだろうか。男女の営みを見たいなど、異常なことである。

「美紀さん、もう下がりなさい！」

娘の亜由美が、厳しい口調で美紀に命じた。母親似の美しい少女の顔が険しい。抑えきれない怒りが美少女の顔に浮かんでいる。家政婦の美紀は、母親が木村泰造に身体を弄ばれていることを当然知っている。泰造は、この屋敷に来ては、母を抱くのだ。父が事業に失敗し、多額の負債を抱えて自殺するまでは、何一つ不自由のない優雅な暮らしぶりであった。それが今は、生きるためとはいえ、母は高利貸しの泰造の情婦となりはてている。そればかりか、永年勤めている家政婦の美紀さえも、さゆりと亜由美の母娘に対して小馬鹿にしたような態度をとってくるのだ。

美紀の両親は離婚をし、美紀は母親と一緒に暮らしていた。その母親が癌に犯された。入退院をくり返しながら徐々に体力が衰えていく母親を見るにつけ、美紀は高校を中退して働くことを決意した。そんな時に手をさしのべたのが、美紀の母親が務めていた山口産業の社長、啓一である。美紀は、この山口家に住み込みで家政婦として働けるようになった。啓一は美紀の母親の冴子の治療費をも負担

し、美紀に対しても高校中退の家政婦としては、相場を上回った給与を渡していた。さゆりは、美紀の母親がとうとう治療の甲斐なく死去したとき、泣きじゃくる美紀を抱きしめながら慰めた。美紀には山口家に対して相当の恩があるはずだ。それなのに美紀が、母に対して恩を仇で返すような言動をとることが亜由美には許せなかった。

「美紀さん、あなたはもうここから出て行きなさいよ！  
あなたを雇う余裕などもうないのよ！」

怒りを美しい顔ににじませる亜由美は、唇を振るわせながら、立っている美紀を見上げ、にらみつけた。

「お嬢様、ご心配なく。私はもうあなたたちに雇われているわけではないんですよ。旦那様から、ちゃんとお給与をいただいていますから、これからもここで働かせて頂きますわ。このお屋敷だってもう旦那様の物ですよ。お二人のお召し物でさえ、…ふふふふ、下着の一枚だって、もう奥様やお嬢様のものではありませんのよ。お嬢様は勝手なことをおっしゃらないでくださいね。旦那様に怒られ

ますわよ」

美紀は勝ち誇ったような目で、椅子に座る少女を見下ろした。

亜由美は唇を噛んだ。惨めすぎた。美樹が言うとおりに、木村泰造に金で買われ、その手中で生かされている母娘の身だ。この屋敷を追われれば、もうどこにも行き場はない。泰造にすぎることでしか、生きることはできないのだ。

「ここを追い出されたら、どうします？風俗で働く覚悟はおありですか？奥様もお嬢様も見知らぬ男性に毎日毎日抱かれても、借金を返すことは無理でしょうね…旦那様に肩代わりして頂いている借金はあまりにも多すぎますわ…」

美紀が追い打ちをかけてくる。

「美紀さん、もう言わないで…わかっているわ…あなたに言われなくても分かっています！」

さゆりが震える声で美紀の言葉をさえぎった。

「お母様、わたし…くやしい…もう…死にたい…」